

THE ORIGIN & THE MIRACLE (of Creation)

Jan Hoet

出展: "A Son of Painting" Catalogue. Published by S.M.A.K., 2001

翻訳: Chat GPT

小林正人は、創造の起源を探し、思索しながら自己のアイデンティティを定義しようとしている、と言い始めることもできるだろう — だがそれではいかにも大仰に聞こえてしまう。しかし確かなこととして言えるのは、小林が本質的に絵画芸術そのものから出発しているという点である。すなわち、絵画とは現実の対象をキャンバス上のイメージへと翻訳するものである、という理解から出発しているのである。

キャンバスは目的であると同時に境界でもある。絵画表面 — すなわちキャンバスの大きさ — が、イメージの限界を決定するからだ。これらの境界は、画家の情熱と相反する要素である。したがって小林は闘わざるを得ない。彼は、絵画表面が課す制約と、無限に広がる想像力の自由さとの対立と格闘している。

この闘争の結果は、二次元の表面と三次元空間のあいだのどこかに位置づけられる。まさにこの中間領域において、生命的な「緊張」が生まれるのである。1988年のドローイング《Sleep》を思い出すが、この点で典型的な作品である。作家は裸体を描いているが、突然、紙の「境界」に突き当たる。その結果、モデルの脚は画面の外へはみ出してしまふ。この問題の解決策は自ずと現れる。モデルの身体の形態が支持体の大きさに合わせて調整されるのである。

この点において絵画も同様である。キャンバスは巨大で、ほとんど記念碑的な規模を持ちながらも、常に人体的スケールが保たれている。小林は自らの身体の限界を考慮している。作家はキャンバスを操作できなければならず、それに圧倒されてはならない。木枠から皮膚のように垂れ下がる緩やかなキャンバスを、扱い、つかみ取ることができなければならない。実行可能なことのみが、異例の結果を生み出し得るのである。

絵画そのもの — すなわち絵具を操作すること、描くという身振り —こそが、小林の特に関心を寄せるものである。人間と世界に関するあらゆる知識は、絵画的身振りへと還元される。それは単なる運動行為ではない。心理的内容に加えて、その動きは闘争をも示唆する — 闇と光、情熱と犠牲、創造と喪失、野心と脆弱さのあいだの闘争である。小林は空間を把握しようとして試みるが、その作品はむしろ、この点における無力さを正確に表現している。

小林の作品は、絵画芸術への賛辞であると同時に、過去の先達 — かつての画家たち — の

成果を否定する行為でもある。それは絵画に敬意を払いつつも、同時に絵画を破壊しているかのように見える。長い伝統を持ち、私たちがよく知るメディウムによって自己表現を行うとき、問題となるのは単に「何を」「どのように」という問いだけではない。「なぜ」という問いも同様に重要となる。作品には、ある種の必然性が含まれていなければならない。観る者は、その特定のメディウムの使用が作家にとって不可欠であること、すなわち過去の巨匠たちの業績を継承したいという郷愁的願望以上のものがそこに関わっていることを感じ取らなければならない。

このとき、必然性と欲望はひとつとなる。私たちが直面しているのは、無視することのできない内的確信、抗いがたい衝動である。小林の場合、私はその衝動の存在を作品そのものの中に感じる。それはこうでなければならず、こうであるほかないのだ — この場合、筆ではなく、指や手、肘、そして身体全体を用いるという方法によって。それは他のあり方ではあり得なかったのである。

Jan Hoet, Gent, 2001